

文語歌曲 草薙の神つるぎ あふげや同胞四千萬

谷田貝常夫

明治てふ時代になりたるは、日本なる國土に住む日本人すべてが、一つの生命體としての國の民になりたることを意味す。そが上に、歐米のごとき近代國家に拮抗せざるを得ぬ國際情勢にありたり。教育の目的もそこに添ふは必然のことにて、音樂教育も藝術を指さんよりは、國の近代化路線を進むるための、國民なる意識を育つるための一方策ともいふべきものたり。

明治十四年（一八八一）に出版されたる「小學唱歌集」に載る「螢（の光）」は、世界中にて別れの歌（Auld Lang Syne）として歌はれ、年末のカウントダウンにも使はるるメロディにて、日本語の歌詞つけられし「螢の光」、その二番には別れの情にじむ。

一、螢の光、窓の雪、書よむ月日、重ねつゝ。

いつしか年も、すぎの戸を、明けてぞけさは、別れ行く。

（注、當時の卒業式は七月なれば、作詞者、螢より歌ひ出したり）

二、とまるも行くも、限りとて、かたみに思ふ、ちよろづの、こころのはしを、一言に、
幸さいわいくとばかり歌ふなり。

されど、元々の唱歌の三番には「筑紫から陸の奥」と國土が顔を出し、

三、筑紫のきはみ、陸の奥。うみやま遠くへだつとも、その真心はへだてなく、

ひとつにつくせ、國のため。

さらに四番には

四、千島の奥も、沖繩も、やしま八州のうちのまもりなり。 至らん國にいさをしく、

つとめよ、わがせ夫、つが恙なく。

と擴がりたる版圖に言及し、領土防衛に意をはらへと檄をとばす。千島など今人の記憶には残らざれど、明治七年に榎本武揚の努力により日本に讓渡されたる北の島々なり。

明治三十三年（一九〇二）に發表され、第一集の十萬部も賣れたる「鐵道唱歌」に「地理唱歌」なる冠のつけられたるも、近代化路線の一證左なり。同じメロディに六十六もの歌詞のつけられたる音樂の例はそれまでに無きものならむ。藝術性より即物性重んじられたるは當然のことなり。中に面白きは、三十三番の熱田神宮が説明に、唐突に「同胞四千萬」と人口數のあらはされたることなり。同胞四千萬、つまり具體的なる數字により、日本なる國歌を、當時の國民全員を意識さす。

大正三年（一九一四）の「尋常小學唱歌」となると、版圖はさらに擴大し、「同胞すべて六千萬」と人口も殖ゆ。

一、北は・・・・・・・・・・・・・・・・おしなべて

我が大君の食す國と、朝日の御旗ひるがへす 同胞すべて六千萬。
雜駁なる地理感覺なれど、人口の増えつづけたること、認識せらる。

昭和十五年（一九四〇）には「紀元二千六百年」なる歌、歌はれたり。

金鷄輝く 日本はまの榮ある光身にうけて／いまこそ祝へ この朝あした／

紀元は 二千六百年／あゝ 一億の胸はなる

ここに「一億」なる人口示さる。以後毎年のごとくに作られたる歌詞に「一億」が、日本國民の意にて使はる。戦意昂揚が目的なれど、歌詞には空騒ぎの様見ゆ。

「出せ一億の底力 櫻咲く國 日ノ本の 無敵の軍の前進に」(昭和十六年)

「進め！一億！火の玉だ！行くぞ！一億！どんと行くぞ」(昭和十七年)

以後、大戦も終はりて寡聞なれど、人口數の歌詞に入りたるを知らず。國威を示す必要の失せたるゆゑならむか。

唱歌なり歌謡の歌詞に頼ることなれど、千島より台灣にいたる版圖に六千萬人の住みたるは、大正三年(一九一四)のことにて、以後日本の人口は増えつづけ一億人を越ゆ。昭和二十年(一九四五)、日本は舊の國土の一部を失ひたれば、人口統計によるに約七千二百萬人となれるも、以後平成二十二年になるまで増えつづけ約一億二千八百萬人にいたる。されど既にして「生産年齢人口」は昭和五十年以來減少し、現在總人口も減りつづけをるは周知のことなり。政府は一億人をめどとせるやうなれど、適正なる人口はいくばくなるべきかは人知をこゆることならずや。唱歌の歌詞より思ひまうけぬ穿鑿をなしたり。

(平成三十年四月十五日受附)